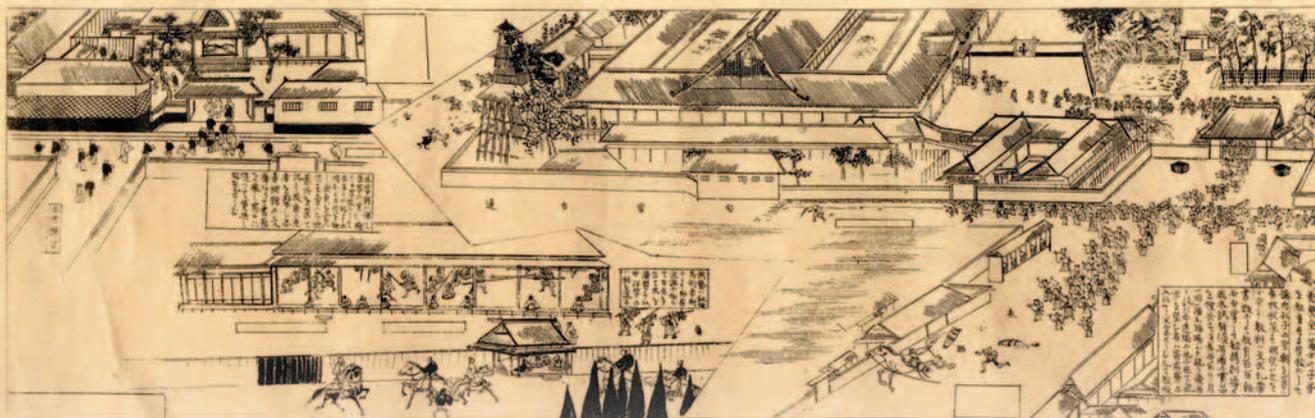


125 宮城県図書館創立125周年記念特集

宮城県図書館のルーツを訪ねてその2 —公共図書館の先駆「青柳文庫」—

『仙台中行事絵巻』嘉永2年(1849)／複製。図の左が「青柳文庫」に向う人々。



本館書庫内の「青柳文庫」の棚



『青柳館蔵泉譜』（青柳文蔵著）

「青柳文庫」の跡地に立つ記念碑
(仙台市青葉区一番町)

本に夢中だった頃

みなみらんぼう

僕は昭和十九年生まれなので、幼い頃はいわゆる戦後で本が少なかった。絵本も『さるかに合戦』とか『もも太郎』などの古典的なものばかりで『のらくろ』の漫画本などは、それこそ破れても継ぎはぎしてまで読んだ記憶がある。

五年生ぐらいになると、学校図書館が一種の流行になった。主として冒険小説などだが、これを競い合って借りるようになった。アルセーヌ・ルパン全集、シヤロック・ホームズ全集、江戸川乱歩全集、それに少年ケニアシリーズなど、いつもランドセルは教科書よりも、借りた本でズッシリと重かった。

六年にもなると、他のオピニオンリーダー達の読む本が気になり始める。「あいつ、こんな本読んでるのか」と気になり「じゃ僕も読んでみるか」と思っ借りたのが、夏目漱石の『坊ちゃん』だった。

こうして読書力は学校図書館で鍛えられ、日本文学全集から、世界文学全集などに移り、知的興味が満たされていったのだった。